
魔法戦士リリカルなのは 1st memory

黒衣の戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦士リリカルなのは 1st memory

【Zコード】

Z2837T

【作者名】

黒衣の戦士

【あらすじ】

記憶を無くした零は一体何を見つけるのだろうかそしてこの戦いの先にいつたい何があるのだろうか。

投稿は少し遅く、いろいろなものをパクリながら書いていきますが温かい目で見守っておいてください。

キャラクター紹介（前書き）

初投稿の黒衣の戦士です。

初めてで分かりにくい表現など多いと思いますが楽しんでいただけたら幸いです。

ではキャラ崩壊・オリキャラOKの方楽しんでいくください。

ではオリジナルキャラクター紹介始まります。

キャラクター紹介

高町 零（たかまち れい）	性別 男	年齢 9歳	髪型 色は銀髪で少し長め	眼の色 緑	性格 普通で冷静	一人称 僕	魔力カラー 青	魔力変換スキル 風 炎 水 岩	レアスキル 空間移動	ある場所に瞬間移動できるワープと違い移動中も攻撃は当たる、魔力消費はかなり高く連續使用はできない。	一定範囲の周りの状況が予測できる。	好きなもの（こと）	なのは 平和 修行 家事（主に料理）	嫌いなもの（こと）	戦い 甘すぎるもの 辛いもの アリサ・バニングス 平和を壊す奴記憶を無くしさまよつてているところを高町士朗に助けられ記憶が戻るまで高町家でくらすことになった。
デバイス	名前 レイナ	種類 インテリジェントアームドデバイス	通常時 剣の形のしたネックレス	性格 明るい妹	モード										

1 s t 名称 桜

通常時はこのモード、これ以上説明しようがない日本刀。

2 s t 名称 属性によつて変化

魔力変換スキルの装備 風炎水碎^{フウエンスイサイ}大剣になり、各能力剣に付与（自動的に）、発動中魔力が減つていく。（イメージはフェイトステイナイトのセイバーの剣から不可視能力を抜いたもの）

3 s t 名称 双

日本刀の双剣になる。

あまり話すかわかりませんが一応性格は考えました。

キャラクター紹介（後書き）

まあとりあえず今のところはこれぐらいです。
新しく設定がきまりましたら番外編などで随時伝えます。

プロローグ（前書き）

いつも黒衣の戦士です。
キャラクター紹介を見ていただいた方ありがとうございました。
では、プロローグ始めていきたいと思います。

プロローグ

雨が降り続いている中を一人の少年が傘もわざずに歩き続けている。

「僕はいつたい誰なんだろう、そして「」など「なんだらか」と一言つぶやくと少年は再び歩き続ける。

そして、髪屋とう店の前で少年は倒れる。

「もうだめだ、体力も限界だしもう動けない」

そこで少年の意識は闇に沈む。

すこしして店を閉めようと男性が店の中から出ってきた。

男性は店の前で倒れている少年をみつけ声をかける。

「あのー、だいじょうぶですか？」

「…………」

「どうやら氣を失つてゐみたいだな、見たところのはと回に年くらいか、でもこのままじゃ風邪をひくし一応家に連れて行こう。」

男性は少年を抱えると店を閉め、家に帰った。

プロローグ（後書き）

とつあえず少ないですが今回はじれりいで勘弁してください。

投稿は時間があり思いつくとすぐに投稿していくのがかなり遅いペースだと思います。

でも最後までよんでいただけたらありがたいです。

ではまた次回。

第一話 田覚め（前書き）

今回からやつと高町家の人が出ると思つ。

第一話 田覚め

「うーーん・・・・・」

少年が田を覚ますとそこは、普通の家の天井があり自分は布団に寝ていた。

「いつたいどうこうことだ?・・・えーと、たしか僕は店の前で倒れて・・・なるほど僕は助かつたのか。」

少年があれこれ議論していると、とある人物が部屋の中に入ってきた。

「おつ氣がついたか、よかつたよかつた。」

「どじか、まだ具合の悪いところはない?」
と聞かれた。

「とりあえず大丈夫ですが、じには一体どじですか?」

「じには高町家、きみは俺が経営している、店の前で倒れているのを見つけて家に連れてきたんだ。」

「わうなんですか・・・・・ありがとうございます。」

「君、じには運ばれ来て2日間も眠りっぱなしで心配していたんだよ。」

2日?・・・・・

「えつ・・・・・1日もじには眠つてたんですか?」

「ああ、もうぐっすりと
たぶん疲れがたまっていたのだろうと少年は思った。

「わういえばまだ君の名前聞いてなかつたよね。

私は高町桃子。」

「俺は、高町士朗、君の倒れていた店のマスターをしている。
君の名前は？」

「僕は・・・あれ思い出せない・・・僕はいつたい誰なんだ?」「
部屋の空気が一気に重くなつた、すると新たに女性が入ってきた。
の空氣こんなに重いの?」

「えーと、実は僕は記憶喪失みたいで何も覚えて無いんです。」

部屋にいる全員が暗くなる・・・士朗はなんとかひきつる笑顔で、
「じゃあ、記憶が戻るまで、ここで暮らす?」

少年は驚いた、見ず知らずの自分を助けてもらひ、しかも記憶が戻
るまでここで暮らせるということに

「いいんですか?本当に迷惑かけるかもしけないし」

「私は別にいいわよ。」

「私もいいよ。」

早くも〇〇と返事が来た。

「じゃあ、後はなのはと恭也に返事を聞くだけだな、一応一人に説明してくるから、一息ついたら下の居間に来てくれるかな。」

少年は静かにうなずくと全員が部屋を出て行つた。

少年はつぶやく

「この子か・・・。」

第一話　目覚め（後書き）

次回、本編の主人公登場します。

感想を書いてくれるとうれしいです。

ではまた次回。

第一話 始まりの朝（前書き）

このペースで更新していけたらマジ楽です。

もしかして少しけない？

第一話 始まりの朝

「うわあ、今日は休日らしい、朝の10時気持ちの整理がつき少年は居間の扉を開けた。

「…………とこうわけなんだ。」

と聞こえたのちゅうじ話が終えたところだった。

「俺は別にいいナビ、なのははどうだ？」

「私はちょっと、心配だけど……もしもこの家で暮らすとして、あの子はどうで寝泊まりするの？」

なのはは当たり前のような質問をする、たしかにこの家は広かつたがたいして他の家と変わらない、唯一違うとすればなぜか家に道場があるところだとだ。

「まあ、道場で寝泊まりできれば、十分だろ。」
とこりこりになつた。

扉を開けたまま固まつていたので扉を開める音でようやく少年がいることに気づいた。

「おっ、きたねこの一人がわいわい言つた恭也となのねだ。」

「はじめまして、高町恭也だ。」

「はじめまして、高町なのはです。みんななのはって呼ぶから君もなのはって呼んでね。」

全員の自己紹介の済んだところ問題が起つた。

「この子、なんて呼べばいいの？」

それもやうである」の少年は記憶を無くしていくので名前もわからない、どう呼べばいいのだらう。

「じゃあ、僕の名前は高町零でいいかな？」

「……自分で思いついたのか？」

「はい・・・そうですが何かまずかったですか？」

不思議そうな顔で士朗に聞く。

「いや・・・この短時間で思いついたことに驚いてね、何かエピソードでもあるのかな？」

「えーと・・・記憶がないつまりゼロ、からゼロの他の読み方で漢字にできるのはこの読み方なので・・・この名前でいいかなって思つただけですが・・・。」

真顔で答えられ部屋の空気が重くなつたが少年の名前は高町零に決まった。

第一話 始まりの朝（後書き）

やつと高町家全員 + を紹介できました。

次からはゆつくじと魔法の要素をくみこんでいきたいと思います。

零「この小説、俺が主人公のはずなのに前の登場が一番遅いって
どうこいつとなのかなー？・・・レイナ、セットアップ。」

作者「ちょっと、まだ出してないキャラ呼ばないでー。」

零「問答無用、2stモード炎、おらあ」

作者「ちよつやめい」れ以上のネタばれば・・・さやああああ。

零「大丈夫、峰打ちだ。」

作者「2stモード峰ないよ。
ばたつ・・・・・・・・・・・・

第三話 われかの先の「」と（前書き）

ホント誰か読んでください、マジで泣かせたいです。

第三話　これから先のこと

とつあえず場の空気が安定してきたとき士朗が零にいった。

「とりあえず、記憶が戻るまでは零君も家族の一員なんだし、俺のことにお父さん、桃子のことはお母さんと呼んでくれ。」

士朗の提案に零は少し驚いたがこれからのこと話をすることにした。
「士朗さん、さすがに泊めてもらうだけでもありがたいのに、やっぱり家族の一員として過ごすなら、お店の方とか手伝つたりしたいんですけど……」

「……」

零は提案してみるが士朗は答えない。

「父さん、・・・・・」

呼んでもみると、士朗は

「たしかに、お店の前で広告を配つていたら、零の知つている人が声をかけてくれるかもしれないな、よし、じゃあ次の休日から働いてくれるかな？」

「ありがとう、父さん・・・・・次の中日から一僕、平日の間、何をしておけばいいの。」

零が士朗に聞く。

「あつ、まだいつになかったつけ、平日はなのはと同じ学校の同じクラスに行くことになつたから。」

「えええ！－そんなの聞いてませんよ。」

その話を聞きなのはも、ふえええと言ひながら驚いている。

「あたりまえじゃないか、零はほほなのはと同じ年なんだから、義務教育はちゃんと受けないと。もう編入手続きはすんでるから、明日から学校頑張ってね。」

「父さん、いきなり明日からって言われても、教科書もないし、たしかなのはの通つてる、聖祥大付属小学校つて制服ですよね、どうやって通つんですか。」

桃子は隣の部屋から箱を持ってきた。

「零君が寝てる間にいろいろ済ませておいたんだけど制服とかはやつぱり間に合わなくて恭也のなんだけど一回着てくれる?」

零は仕方なく制服を着てみると以外にピッタリで「よく似合つていた。

「制服はこれで大丈夫、教科書は明日、学校でくれるらしいから安心だな。」

「とりあえず今日は海鳴市周辺でも案内しますか。」
と零は美由希に手を引っ張られてかけることになつた。

第三話　これから先の「こと（後書き）

作「いやーそろそろグダグダになつてきたなー」
なのは「まあ、思いつきで始めたんだから遅かれ早かれなると思つ
ていただけね」

零「てか、この小説まだ魔法とか全然出て無いし、次の話どうする
の」

作「うーん、いろいろ考えた結果案内はオールカットにしようかな
つて思つています。」

零「このだめ作者」

作「すいません」

なのは・恭也・美由希「そういうえば私たち最近出て無いね」

作「とりあえず魔法がかかわってきたらなのはの登場回数増えるか
も、他の人たちは零に剣の修業させようと思つてているのでその時
だそうかと思つています。今回いろいろとドわすれのところが多くて
さなのはのアンソロジー読みながらうつたんだよねー」
まあ後2話ぐらい先に魔法出していきたいと思います。

みなさんの感想を見るとやる気がでますので呼んだ方いろんな人に
ひろめていつてください。

第四話 登校開始（前書き）

やつとお気に入り登録してくれる人がいました。
ありがとうございます。

Twitterなどで広めてくれるとうれしいです。
感想や間違いなど送ってくれるとありがたいです。

第四話 登校開始

昨日は美由希に連れられて海鳴市の周辺を回る日となつた。翠屋の場所や商店街など、家に帰ると零の歓迎会などいろいろなことがあった。

歓迎会の後、学校の行き方や先生のことなどのはと話し結構、打ち解けていった。

次の日の朝・・・

「やっ、はっ・・・」

とこの掛け声が聞こえてきて零は目が覚めた。

扉を開けると美由希と恭也が剣道の練習試合をしていた。

「じめん、起しちゃた?」

美由希は零に気づくとあやまつた。

「大丈夫ですよ、丁度いいぐらいの時間に起きられましたし、そつといえは毎日ここで剣道の練習してるんですか?」

「やうだよー、恭ちゃんは一田に一回ぐらいだけね。」

美由希は恭也からタオルを受け取り汗を拭きながら答える。

しかし、零にはちょっと違和感があった。

「でもわたくしの一戦ひとつとおかしくありませんでしたか?」

恭也は少し驚いた顔をして答えた。

「ああ、家に伝わる、父さん直伝の剣術なんだ。」

恭也の答えに美由希が付け加えるように

元

「でも、普通の剣道とあまりかわらないけどね。」

恭也があることを提案する。

「もしよかつたら明日、朝連いつしょにやつてみるか？」

美由希は最初から思つていたのか即答する。

「私は別にいいし、家の剣術と普通の剣道の違いが見分けるなんて珍しいしもしかしたら、記憶を無くす前、剣道やつていたのかもしれないし、やつてみたら記憶を思い出すヒントになるかもね。」

「じゃあどりあえず、明日だけやつて続けられそ娘娘たらずつとやつていきます。」

零は剣道をやつていた一人がとてもかっこいいと思つた。

・・・数十分後

身支度を済ませ剣道を見学していた零たちを制服姿のなのはが呼びに来た。

「おねーちやーん、おこーちやーん、零君、朝ーいはんだよ。」

恭也はおはよう、なのは、と短く答へ、美由希もおはようと答えた後、なのはにあたらしいタオルをつけとつた。

「おはようございます。なのは。」

なのはは、笑いながら、

「普通に言つてよ零君。」

零は笑いながら

「おはよう、なのは。」

とこたえると、なのはは、

「おはよう、零君。」

朝の挨拶を済ませた後、四人は居間に向かった。

居間では士朗が、新聞を読みながらコーヒーを飲んでいた。

四人が部屋に入ると士朗と桃子が

「おはよう、零君。」

と零だけに言った、もう二人は挨拶してゐるのかと思い零は、

「おはよう、父さん、母さん」

慣れたのかそうよんだ。

なのはと美由希・恭也・桃子が席に着くと、零は余つてゐる席に座り、全員は

「いただきます。」

と言つて食べ始めた。

食べている間、士朗と桃子がイチャついていて、驚いたがなのはが
「いつもの光景だから気にしなくていいの。」

と言つたので気にせず朝食を食べ終えた。

零は道場からカバンをとつてくるとなのはが門の前で待つていて、

士朗と桃子も玄関にいた、零となのはは同時に

「「いってきます。」」

と言つて出発した。

第四話 登校開始（後書き）

作「ふーやつと登校のところまで書けた。」

なのは「わたしと零君がどういう話で打ち解けあつたのはオールカ
ツトなんだね。」

作「ちょ・・・ダークネスオーラを展開してデバイスをつきつけな
いで怖すぎるから。えーと次からはなのはの友達と零の苦手な相手
が登場じやまた」

なのは「遺言はそれでいいの？」

作「ちょっと、まつて——。」

なのは「スター ライト ブレイカー」

ちゅどーーん

作「この悪魔め・・・

がくつ

第五話 転校生の宿命（前書き）

もしかして、結構読んでる人いてる？

第五話 転校生の宿命

聖祥大付属小学校は海の近くにある学校である。

この学校はバス登校なので、なのはと一緒にバスに乗った。

バスの一番後ろの席になのはの友達の用村すずかとアリサ・バーングスが座つていてなのははその真ん中に座つて話を始めた。

零はあいている席に座つて空を眺めていた。

すずかは心配そうな顔でなのはに聞いた。

「今日、なのはちゃんと一緒に乗つてきた男の子ってだれなの？」

「もしかして、なのはにつきまとつてるストーカーじゃないでしょうね」

アリサは怒りオーラを全開にしてなのはに聞く。

そのオーラに近くの男子は少し震えている、零も背筋に悪寒が走つた。

なのははにやははと笑いながらアリサの怒りをしづめる答へる。

「大丈夫、今日は一緒だつただけなの。」

「まあいいわ、なのはが大丈夫つていうなら大丈夫よね。アリサの怒りオーラが少し弱まる。」

「で、なのはちゃんあの子の名前知つてるの？」

すずかが余計な質問をした。

「学校に arrivé とわかるから。」

と一言答えると、強引に話の流れを昨日のテレビの話にした。

数十分後・・・

学校に到着しバスをおりた零は一度、伸びをし深呼吸をしあこせつ
のため職員室を探しに校内に入った。

数分後・・・

「うーむ・・・すっかり迷子だ、職員室どこだらう・・・。

零は校内で迷子になっていた。

すると前から先生らしき女性がいたので職員室の場所を聞くこととした。

「すいません、あの今日からこの学校に通うことにになった高町零な
んですが、職員室つてどこにあるんですか。」

先生はあーーの子かといつ顔をしながら答えた。

「私はあなたの担任の鈴木結衣です。職員室に行くのはいいけども
う時間がないよ。」

零は若干、驚きながら

「えーと、職員室に行こうと思ったのは担任の鈴木先生にあいさつ
に行こうと思ったからなんですが行く必要がなくなりましたね、今
田からよろしくお願ひします。」

あいさつがすんだ瞬間チャイムが鳴ったので零は案内をれるよひに
教室に行つた。

先生が教室に入ると、零は少し廊下で待っていた、教室の中であいさつが聞こえた後、当たり前のよつこ、元通り

「今日から、このクラスに新しい人が一人増えます、みんな仲良くしてあげてくださいね。」

と言つと同時に生徒から「男女どっち」、といづ質問が来たので、普通に

「男の子でーす。・・・では、転校生君入ってきてください。」

零は緊張しながら一礼して教室に入った、すずかは、

「つあ、あの子ってバスになのはちゃんと一緒に乗つてきた。」

と小ちがな声で呟く。

零は一礼し自己紹介を始める。

「はじめまして、高町零です、えーと僕はいろいろあって今、高町さんの家で暮らしています。これからみんなと仲良くなしていけたらいいと思つています。よろしくお願ひします。」

自己紹介が終わり、拍手が終わると先生が、

「じゃあ、零君は高町さんの横が空いてわね、そこに座つてください。」

と言われ、席に座ると同時に、チャイムが鳴り、朝のHRが終わつた。

先生が教室から出るとクラス全員が零の周りに集まつた。

「ねえねえ、零君つてどうして高町さんの家で暮らしてるの？」

「趣味とか好きなものは？」

「得意教科は何？」

などの無限の質問地獄になつた。

第五話 転校生の宿命（後書き）

作「あー、先生の名前考えるの疲れた。」
なのは「たしか家の資料のどこにものつてなくて自分で考えたんだ
つけ。」

作「そうですよー、最終的にあるキャラをパ・・・ゲフンゲフン、
自分で考えたんだよねー。でも必死に考えた割に登場回数が少ない
んだよ。」

零「テスト前に何やつてんだよ。」

作「まあ、いいじゃん、どんなテストかわからねーし。」

零「まあ、頑張れ。」

作「ありがとー、まあつきは授業オールカットで番外でも書こいつか
なーと思つています。では
なのは・零・作「さよならー」

番外編 キャラ補足説明（前書き）

キャラのイメージがよしやく固まってきたので書いていきたいと思います。

番外編 キャラ補足説明

高町 零 （セット・アップ時）

眼の色 赤

一人称 僕

それ以外は変わらない。

1stモード桜 剣の名称 ニバンボシ

2stモード風の時 シルファリオン

常に風をまとっている 移動・攻撃スピードが上がるが、威力が下がる。

炎の時 エクスプロージョン

常に炎をまとっている剣 剣が何かに触れると爆破することができる。攻撃力は上がるがスピードは変わらない。

水の時 ヴォーバル

常に水をまとっている剣 地面に突き立て水の水壁を作ることが、可能、攻撃・防御に使用可。

碎の時 サクリファイス

普通の大剣の状態だが、剣を地面に突き立て石槍を発生させる、唯一の物理ダメージを与える（2stの中）

3stモード双 一本は二バンボシ、もう一本は明星二号

技（2stでは発動不可能）
紅破刃 こうはげん

対象 一人

赤色の衝撃波を飛ばす。

紅破追蓮

対象 一人～二人

赤色の衝撃波を二個飛ばす。

1stなら一発目まで少し時間がかかるが、3stなら同時に発射可能。

紅狼撃

対象 一人

1st専用、剣での突きの後、拳で殴る。

幻紅斬

対象 一人

剣で斬りつけながら敵の背後に回る、3stでは攻撃回数が増える。

紅破牙狼撃

対象 一人

1st専用、紅破刃を飛ばした後、紅狼撃で攻撃 ガードブレイク付加。

守護結界

対象 ・・・

防御技、発動中少し傷が治る、死角からの攻撃も防ぐが魔力消費が多いので連續使用はできない。

紅龍連牙斬

対象 一人～数人

回転しながら前進し斬りと蹴りを交互に繰り出し攻撃する、(3s tでは使用が難しいので使用しない)。

紅月狼影陣

対象 一人～数人

対象内にいる敵を何度も斬りつける。1stモード専用の必殺技。

天翔紅翼剣

対象 一人～数人

攻撃範囲内にいる敵を輝く翼となつた剣で斬り裂く。3stモード専用の必殺技。

天狼滅牙・風迅

対象 一人～数人

2ndモード・シルファリオン専用の必殺技、連續で斬つた後、風圧で吹き飛ばす。

天狼滅牙・飛炎

対象 一人～数人

2ndモード・エクスプロージョン専用の必殺技、炎のまつた剣

で連續で斬り、最後に大爆発を起こす。

天狼滅牙・水蓮

てんろうめつが・すいれん

対象 一人～数人

2ndモード・ヴォーバル専用の必殺技、連續で斬った後、剣を地面に突き立て巨大な水の壁を発生させる。水壁にふれると水圧でつぶされる。

天狼滅牙・碎霸

てんろうめつが・さいは

対象 一人～数人

2ndモード・サクリファイス専用の必殺技、連續で斬った後、剣を地面に突き立て石槍を多数発生させる。唯一の物理攻撃でガードブレイク付加。（イメージ的にはテイルズシリーズのグランドダッシュヤー）。

作者
性別 男
年齢 18

大学一年、この作品の作者いわばこの物語の神、物語の誤字・脱字・更新の遅れはこいつのせい。

あとがきでほぼ毎回制裁を受けている。

出番、減らし
対象 このキャラ一人ぐらい

対象キャラクターの出番を減らす。

番外編 キャラ補足説明（後書き）

やつと技とかいろいろ固まつてきました。

これから、大学が忙しくなるので更新が遅れるけど続けて呼んでくれると幸いです。

感想を送ってくれるとやる気が出ます。

作者「いやー一つかれた、書きながら技名覚えるのがこんなにしんどいなんて。」

零「まあ疲れるのはわかるけど、この技や武器の名前つてもひつきりテイルズとRAVEのパクリだよな。」

作者

「出番減らすぞ。」

零「「めんなさい。」

第六話 下校（前書き）

今回、とても短いです。

第六話 下校

一日の休憩時間をすべて質問に使われへとへとになつたが、なんとか無事に終わりのＨＲをむかえた。

「では、零君は帰りに職員室に寄つてください。・・・ではみなさんさよなら。」

あいさつを終え生徒の大半が教室の外へ出た後、伸びをしているとなのはが話しかけてきた。

「いやははは、大変だつたね零君。」

「まつたく、本当につかれた。」

なのはが零と話していると、すずかとアリサが寄つてきた。

「なのは、今日、塾あるけど」これからどうする?
アリサがなのはに聞く。

「つーん、塾まで時間まだあるし、零君に町でも案内してあげよう。」

すずかはなのはに提案する。

「えつと、昨日美由希さんといつて町案内されたんだけど。
零は答えると、なのはは言ひ、

「じゃあ、今日夢に出た公園に行こうよ。」

なのはの提案に零とすずかとアリサは

「どうして?」

「えっと・・・結構、繊細な夢だつたし塾の近道だし、塾行く前に零君を翠屋に案内してあげれるから・・・」

アリサとすずかと相談していた
「私は別にいいけど」

「すずかが行くなら私もいく」
アリサとすずかは決まった。

「（まあ昨日一日じやちょっとあいまいだしな）僕もいいよ。」
零は返事をした後、職員室に行き教科書をもらい、なのはたちと合流した後、下校するのであった。

この近道が、一人の運命を大きく変えることになるのを知らずに

第六話 下校（後書き）

次にやつと出るかなー ノーノ君、どうせやつてレイナ登場させよう。

第七話 赤い宝石とネックレスとフューレットと（前書き）

ユーノ君登場。

感想お待ちしています。

第七話 赤い宝石とネックレスとフューレット

教科書を持つている零は、全く疲れて無い様子でなのは達と話しながら公園の中を歩いていた。

「よく、そんな重たいものずっと持つて疲れないわねー。」
アリサは少し感心しながら零に話しかける。

「ちょっと、重たいけど疲れるってほどじゃないし学校の質問攻めに比べたら楽な方だよ。」

なのは達はその答えに同時に苦笑いし、アリサは近道を見つけて少し走る。

「うひちこひ、ちゅうと道悪いけど近道なんだよね。」
アリサは血漫するように答える。

四人はその道を歩いていると、
『助けて・・・』
とこう声が聞こえてなのはは振り向く。

「?.?どうした、なのは」

零は聞く。

「今何か聞こえなかつた?」

なのははすずかとアリサと零に聞く。

「・・・私は聞こえなかつたわよ。」

「私も・・・」

「僕もきこえなかつたけど」

三人が答えるとまた

『助けて・・・』

とこんどは、はつきり（なのはのみ）に聞こえ、なのははその方向に走つて行つた。

零たちも走つてなのはを追いかけると、傷ついたフェレットを抱きかかえるなのはがいた。

「どう、どうしよう。」

なのはは三人に聞く。

「どうしようつて、とりあえず病院？」

「獣医さんだよ。」「

零とすすかは同時に答える。

「この近くに獣医さんつてあつたつけ？
なのはは三人に聞く。

零は、まだ完璧に海鳴の町を知つてゐるわけではないので、あたりを見ているとヒモの付いた赤い宝石と剣の形の飾りのついたネックレスを見つけて拾う。

「とりあえず、家に電話してみる。」

なのは達の方もすすかが家に電話することでお付いたようだ。

・・・約三十分後・・・

とりあえず四人はすすかの呼んだ車で横原動物病院にフェレットを連れていった。

治療が終わり、心配しそうにしているなのは達に言つ。
「けがはそんなに深くないし、命に別条はないわ。」

そつ聞くとなのは達は安心したよつな顔になる。

「 「 「 「院長先生、ありがと「ハ」わこめす。」「 「 「 と四人同時に答えた。

「これつて、フュレットですよな、どこのペットなんでしょうか？」

アリサは院長に聞く。

院長は困った顔をして

「フュレットなのがなあ？ずいぶん変わった種類だけビ・・・。」

零は心の中で、

『おいおい、獣医さんがそんなんでいいのか』

と少し思つているとポケットの中に入れていた、赤い宝石と剣の形をしたキー ホルダーを取り出す。

なのはは聞く

「零君、それどうしたの？」

「えつ、そのフュレットの倒れてた近くに落ちたんだよ。」
と答え終わるとフュレットが口を覚ました。

フュレットは不思議そうな顔であたりを見回すと、皿の上に置いた赤い宝石とキー ホルダーのほうに近づきなのはの方を見つめる。なのははそつと手を近付けるとフュレットはペロリとなのはの指をなめ、また氣絶した。

「じぱりべ安靜にした方が良さやうだから、明日まで預かっておこうか？」

と院長は聞くと、四人は

「 「 「 「 はこ、 お願こします。 」 」 」 」

と答える。

「 やういえば三人とも塾があるんじゃなかつたつけ。
零は二人に聞くと

「 あつやば、 塾の時間！ ！」

なのは達は院長先生にお礼を言ひながら塾へ走つて行つた。

零を残して・・・

「 僕、 やういえば・・・ 」

はー、 とため息をつゝ院長をたてて地図を借りてとつあんず翠屋に行
くことにした。

第七話 赤い宝石とネックレスとハーレット（後編）

やつと、コーノ君が登場しました。

つぎは夜の戦い。

ここが腕の見せ所、頑張ります。

第八話 手に入れた魔法の力（前書き）

体力的な問題で戦いまで入るかなあ？

第八話 手に入れた魔法の力

なのは達が塾に行つたあと、零は一人地図を見ながら翠屋を目指していた。

「まつたく、せめて合流場所ぐらい決めてくれればいいのに。」とため息交じりに独り言を言つていた。

・・・数分後・・・

「やつと・・・ついたか。」

零は翠屋に無事辿り着いた。

翠屋の扉をあけると、客は一人もいずカラソコロソという音が響き店の奥から士朗が出てきた。

「おかえり、零君・・・あれ、なのはは？」

「はー・・・僕をほつて塾に行きましたよ。」

零は士朗が出してくれたアイスティーを飲みながら答えた。

「じゃあ、これかたづけたら閉店時間だから家に帰ろうか。」

士朗が立ち上ると同時に零はアイスティーを飲みほし厨房で洗い物をしている士朗にコップ渡し外に立てている看板をかたづけた。

「ありがとう、零君じゃあ帰ろつか。」

士朗は翠屋のシャッターを下ろすと歩き始めた。

「零君、どうだい学校の方は。」

「うーん・・・まだ一日目でよく分からぬけど、今日の質問攻めはきつかったよ。」

零は笑いながら答えると土朗も少し笑った。

家に着いてリビングでテレビを見ているとなのはが帰ってきた。

「「「「「おかえり、なのは」「」「」」

なぜか五人共同時に返事し笑いが生まれた。

笑いがおさまるとなのはは

「「めん、零君塾に急いでたからおこてちやて・・・」

なのはは申し訳なさそうに言つ。

「大丈夫、ちゃんと帰つてこれたし、でも次からは注意してよ。」
と笑いながらなのはの頭をなでた。

・・・その後、夕飯を食べ、寝る準備をした後、零は寝るために干しておいた布団を引いていると玄関が開く音がした。

「ん?・・・こんな時間にだれか出かけるのか。」

零は玄関の方を見ると、私服姿あたりをみまわしながらなのはが
出かけて行つた。

零は不思議に思いなのはに気付かれないように、なのはについてい
つた。

零がなのはを追いかけると昼間の動物病院に着いた。

すると近くで何かが動物病院の壁に突っ込んでおり、横にフェレットを抱えたなのはがいた。

「なのは!! 勝手に出かけたことはいいとしてあれなんだよ?」
フェレットを抱えた、なのはに聞く。

「わからんけど、また昼間みたいな声がして……たらこんなことに……」

零となのはは田の前にいるものが何か考えていると、

「あれは、ジユエルシードが反応して作り出してしまった化物です」と聞きなれない声がした。

なのは達が声の主を探すと、フェレットが一足歩行で話しかけてきた

「「しゃべつた！！！」」

なのはと零は少し驚いたがすぐに落ち着きとりあえず動物病院を離れた。

なのはがフェレットを抱えながらフェレットは話し続ける
「君たちには素質そじつがある・・・だからお願ねがい少しだけ力をかしてくれませんか？」

零となのはは頭に?マークを浮かべながら

「「素質?」」

フェレットは構わず続ける

「僕は、ある探し物のためにここではない世界から来ました。でも僕一人の力では思いを遂げられないかもしない。だから迷惑だとわかっていても素質を持っている人に手伝ってもらおうと・・・お礼します必ずします、だから君たちに僕の持っている力、魔法の力を使ってくれませんか。」

零となのははまだ?マークを浮かべたままで

「「魔法?」」

零は何言つてんのこのフェレットはどう思つていた。

しかし「」の空氣を破壊するよつてわつときの化物が突っ込んできた。

零となのははとつたにかわし話が続けられる

「お礼は必ずしますから・・・」

零は呆れたように

「今は、お礼とかそんな場合じゃないだろ」

と少し怒りながら言いつ。

「どうすりやいいんだよ。」

フェレットに聞くと、フェレットは赤い宝石と剣の飾りのついたネックレスを零となのはに渡す。

「これを手に目を閉じて心をすまして、僕の言いつくり繰り返して・

・・いくよーー！」

二人はこくりとうなづく。

「我、使命をうけし者なり」

「我、使命をうけし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は、この胸に」

「「そして、不屈の心は、」」の胸に」

「「「」」の手に魔法を」」

「レイジングハート」

「レイナ」

「「「セットアップ」」

「Stand by ready set up」

となのはの方からは機械の女性のような音声が

「スタンバイ レディ セットアップ」

と零の方からは女の子みたいな声が発せられ、赤い宝石と剣のキー
ホルダーは輝きだした。

第八話 手に入れた魔法の力（後書き）

次こそは本当に戦いを書いていいと思います。

まだ気が早いかもせんが第一弾も考えていますA、S見ていました人にはわかりますが闇の書の守護騎士を一人増やそうと思つります（パワーバランス的に）。

何かいい名前があれば、感想に書いて送つてください。

後書きの後書きの「一」

コ「やつと、セツフ付きで僕が出てきました」

作「ほんとにこんなんでやつていけるのだろうか・・・」

なの「がんばつてくださいよー、この物語の神なんでしょう」

零「てか、これ終わつてねー上にまだフェイトですら登場してねーのに

第二弾つて気早すぎだろ

作「いや、映画とかならこあたりで言つさじや・・・

零「これ小説だからね、映画じゃないからね

なの（ダーク）「少し・・・頭冷やそつか」

作「またか・・・」

零「やべつ」

なの（ダーク）「スター・ライト・ブレイカー」

作「ぎやややあああ。」

ふすふす

零「今のスター・ライト・ブレイカー黒くなかった？」
ユーノ「黒かつたよね。」

このコーナーでなのはを怒らせないようになつた一人だった。

零　なの　ユーノ「「じゃあ、また次回」」

作「マジで、死ぬかと思った」

零　なの　ユーノ「回復、早つ！！」

QB「僕と契約して魔法少女になつてよ。」

零　なの　ユーノ　作「おまえは出でくるな」

第九話 戦闘開始（前書き）

戦い開始、うまく書けるかなー・・・？

第九話 戦闘開始

レイジングハートとレイナが輝くと同時に桜色と青色の光の柱が生まれる。

「二人ともなんて、魔力だ。」
ユーノは少し啞然としている。

その中桜色の光の方では

「はじめまして、新たな使用者さん。あなたに最適な防護服とデバイスを自動的に選択しますがよろしいですか？」
レイジングハートはなのはに聞く。

「はい！」
となのはは答える。

青い光の方では

「はじめまして、新しいマイマスター。マスターに最適な防護服とデバイスにするけどいいかな？」
レイナは本当の妹みたいに聞く。

「ああ」
と零が答えた瞬間、二人は光に包まれた。

なのはは白を強調した映画版のバリアジャケットに、

零は、黒を強調した黒い長ズボンに白い服の上に黒い上着。

そして腕には銀色のガントレットが装着され腰には鞘とデバイスの
1stモード桜の剣があり、眼が赤色になる。

二人は同時に地面に着地すると化物が一人めがけて突っ込んできた。

零は素早く鞘から二バンボシを抜くと刀でその攻撃を防ぐ。

「ぐつ・・・」

しかし、衝撃はかなりきた。

化物は腕のような触手を伸ばす。

なのはは空に飛んで回避、零はレアスキル・空間予想を使い死角から来る触手も二バンボシで斬つていく、すると化物はユーノの方へ突撃する。

それに気づいた、なのははユーノをかばうためにプロテクションを張る。化物はプロテクションを破るために突っ込んできている。

「利き腕を前に出してください」

とレイジングハートに指示を出されなのはは言われたとおりにする。

なのはの手からショートバレットが放たれ化物は吹き飛ばされ三つに分かれる。

化物は一目散に逃げ出す、二人も後を追うが追い付けない。

「あのビルの上へ行つてください」

と再びレイジングハートに指示されビルの上に着くとレイジングハートはシユートモードに変形する。

なのはは足元にミッド式の魔法陣が展開するとレイジングハートが「よく狙つて、トリガーを引いてください。」

なのははレイジングハートから送られてくるイメージを頼りに敵がロックオンされトリガーを引く。

「ディバイーン・バスターーーー」

レイジングハートから桜色の光が放たれ化物一体を飲み込むが、一體外れる。

「後は、任せる」

と零はなのはに念話で言ひと、レアスキル・空間移動を使い敵の前に回り込む。

零の足元にミッド式とベルカ式のたして一で割つたような魔法陣が展開され、静かにつぶやく

「輝け、鮮烈なる刃。無限の悪を鋭く斬り裂き、対なすものを微塵に碎く。ジュエルシード封印、紅月狼影陣！！」

「ふういーん」

とレイナ言つと赤色の光があたり一帯を包み化物は青色の宝石に変わっていた。

なのはの手の前に一つ、零の手の前に一つジュエルシードが浮かんでいた。

ユーノはなのはに

「その宝石にレイジングハートで触れてみて」

と言われレイジングハートを近づけるとレイジングハートにジュエ

ルシードが取り込まれ

「封印完了」

とレイジングハートは言い蒸気を排出した。

「封印かんりょー」
零も二バンボシを近づけるとジューエルシードが取り込まれ。

「封印がんりょー」

レーベン

再び二人は光に包まれ変身する前の姿に戻りレイジングハートとレイナも元の形に戻る。

卷之三

零は一息つくと後ろからウーウーウーとサイレンの音が聞こえ始めた。

「もしかして、なのは達ここにいると大変あれなのでは……。」

「やべ、逃げるぞなのは。

と零はなのはの手をひつぱり走り出す。

「『おんなじ』」

と叫びながら。

第九話 戦闘開始（後書き）

戦いはやつぱり難しい、あと変身シーンは詳しく述べてコーチユーブが二ㄇ一ㄇ動画を見てくれ。

後書きの後書き

作「いやー、わかつてたよわかつてましたよ自分に戦闘シーンの描く才能がないことを後考えた技全部使つかわからんよ。」

零「まー変身シーンとか文を見れば手抜きってわかるけど」

なの「私的には、変身シーンが恥ずかしいからまだましだと思つけど」

零「そういやこれってTV版と思えばいいのか映画版と思えばいいのか疑問だつたんだけど」

作「とりあえずは両方だねバリアジャケットは映画版だけど」

レイナ「私セリフ少なかつた。」

作「すいません、零が強すぎであまりアドバイスしなくていいと思つたもので」

零「そんなこと言つたら、いつちにとばつちつが

作「大丈夫だ、さつきの戦闘でなのはは魔力を使ひきつてる」

零「なら安心だ」

ハーケーン・セイバー

作「えつ！！」

零「あぶねつ」

作「まだだ、まだ終わらんよ」と言つて立ち上がる。

零「いい加減、復活はえーな

作「神ですか、とりあえず零とレイナの声優考えてみたんだナビ」

零「マジでーー。」

レイナ「ホント？」

作「では発表します零役は富野真吾さん、
レイナ役は藤田咲さんです。

零の方はDOG・DAYSのシンク・イズミ
レイナの方は初音ミクみたいにしゃべってもらいます。」

零「まあ、イメージはしあくなつたな

レイナ「レイナレイナにしてやさよ」

作「単独起動だと」

ひゅんひゅん 刀が回転して飛んでくる音
ぐさつ

作「なぜだ・・・。」

ばたつ

零 なの レイナ ユーノ「それじゃあまた次回」

番外編 そういえば忘れていた」と（前書き）

まあいろいろテストとかあって疲れたので息抜きです。

番外編 そういえば忘れていた」と

作「やつたー、テスト終わったー。」

零「まあまだ追試とか残ってるがな。」

作「まあ今回ばかりは置いといて。」

零「そりゃええ、何、今回。」

作「そりゃ、最近この小説を読み返しきついたことがあるんよ。」

零「きずいたことって？」

作「レイナの正式名のことはなんやけど。」

零「えつ、レイナって正式名称じゃなかつたの！？」

作「うん、そなんだよー俺的には最初がエクスカリバーで強化後がエクスカリバー^{ブレイブエースペリア}凛々の明星みたいな星の名前を入れたかつたわけよ」

零「あー・・・」

作「でもよ、レイナ女の子設定にやつたしエクスカリバーって他の小説にも出てるしなんかいい名前ない？」

零「急に言われても・・・もうViViDのパクリやけどセイクリ

ツド・スターとかは?」

作「うーん、それこの小説書く前から思いついてたんだよ強化後の名前は?」

零「うん、聞かれると思ったよじゃあセイクリッド・スター・デスティニーとかは?」

作「運命か、いいなそれさすがこの小説の主人公。」

零「じゃあこれでいいかなレイナの正式名称はセイクリッド・スターに決定しました。」

作「異論は認めぬぞ、あと強化後の名前は思いつきなので変わるものな。」

零・作「じゃあまた後日」

番外編 そういうえば忘れていた」と（後書き）

テスト頑張ったけどマジ無理です。

次こそは追試に引っかからないように頑張ります。

第十話 決戦後高町家の家族ニーと出合つ（前書き）

かなり久しぶりの投稿です。
いろいろなところを修正しました。

第十話 決戦後高町家の家族「一ノと田舎つ

タツタツタツ

再び氣絶したユーノを抱えたなのは零は警察に見つからないよう夜道を走っていた。

「「はあ・・・はあ・・・はあ」」

二人が走っているところ前にユーノを見つけた公園があり、少し長い階段なので下からは見つからないのでそのまま公園のベンチで少し休むことにした。

「「はあ・・・はあ・・・ふー」」

呼吸をとると零がジュークを買いに自販機に向かった。

零が離れるところ眼を覚ましたユーノが言ひはじめた。

「すみません」

とつばんあやまりだした。

「あ、起しちゃた、ごめんね乱暴で怪我痛くない?」

なのははユーノが田舎めたのに気づくとユーノの体の心配をする。

「怪我は平氣です、もつほとんど治つてるから。」

ユーノはきよに包帯をほどく。

「ほんとだ、怪我の跡がほとんど消えてる。」

なのはは少し驚いている。

「助けてくれたおかげで残った魔力を治療にまわせました。」

「よくわかんないけど、なんだ。・・・ねえ、血口紹介していい？」

とユーノに聞くとジュースを買いに行き戻ってきた零はニヤリと笑い、きずかれないようになのはの後ろにジュースを持ってスタンバイしていた。

なのはは一回咳払いをすると。

「わたし、たかみひやあ。」

なのはが自己紹介を始めた瞬間、零は買つてきた缶ジュースをなのはのほっぺにあてた。

「あははは、ひやあつて、あははは」

零は大爆笑しユーノも少し笑っていた。

「もう、零君つてば」

少し怒りながらなのはは缶ジュースを受け取りあける。

「僕は高町零、零つて呼んでくれたらいいから。」

零がなのはの横に座り先に自己紹介をします。

「私は高町なのは、零君と同じ小学三年生、家族や仲良しの友達はなのはつて呼ぶよ。」

と笑顔で答える。

「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だからユーノが名前です。」

ユーノは言つとなのはは笑顔で

「ユーノ君か、かわいい名前だね。」

と言つと、少ししてユーノがうつむく

「すみません、あなたたちを巻き込んでしまいました。」
なのはは少し申し訳なさそうに

「あっ・・・その」

と小声で言い、また一回りと笑い。

「えっと、たぶん私、平氣。」

と言ふ、零も

「僕も、大丈夫です。」

と答えた。

「さて、じじじや コーノも落ち着かないだらうから家に帰らう・・・
怒られるの覚悟で。」

零は肩を落としながら、なのははその言葉を聞いて

「二や三はま・・・まー」

と笑いとため息を吐きながら、帰ることにした。

家に着くとなのははコーノを後ろに隠し、零はぱれなによつに静か
に戸を開けた。

すると後ろから少し怒った声で

「おかえり、こんな時間にどこにおでかけだ
恭也が怒った表情で立っていた。

なのはがどうぞまかそつと

「えっと・・・その・・・」

と黙りこむと反対側から

「あー、かわいいー」

と美由希が少しかがみながらなのは持つてこぬマーノを見ていた。
すると美由紀が助け舟を出した。

「なのはせ！」のトの「どが心配で様子を見に行つたのね。」

なのははきいてなによつでまだ

「えつと・・・あの・・・その・・・」

と言つていた。

恭也は怒りをしづめて

「気持ちはわからんでもないが、だからとこつて、内緒でとこつの
はいただけない。」

美由希は恭也に

「まあまあ、いこじやない零君も一緒にひつて無事に戻つてしま
てるんだし。

それになのはは良じ子なんだしもつゝでないししないもんね。」
となのはにウインクする。

零は聞こえたこよつと小さな声で

「僕は？」

と言つていた。

なのはは恭也の方を向き

「やの・・・お兄ちゃん内緒で出かけて心配かたびらめんなでこ。
となのはは頭を下げると零も一応、頭を下げた。

恭也は

「うん」

と小さく答へ。

美由希は手を叩くと

「はい、これで解決、でもかわいい動物ねー、母さんなんか、この子見たらかわいすぎて悶絶しちゃうんじゃない。」

となのはに近づいてユーノを持ち上げる。

恭也は少し笑しながら

「その可能性は否定できんな・・・」

と肯定する。

家の中に入りリビングに入ると桃子と士朗はテレビを見ていた。

一人とも怒つておらず、恭也と美由希は黙つてくれたようだ。

桃子はなのはが何か持つているのに気付きなのははテーブルにユーノを置くとす』』速度で桃子に抱えられ、頬ずりされながら

「わーーー、かわいいーーー。ほんとかわいい、わよねー。」

と何回も繰り返しておひ、なのはは

「お母さん、ほどほどにー」

とこつがほほスルーされ、士朗はまだ覚えて無こよひで

「なかなか、かしこそくなイタチじゃないか。」

と言つと、美由希に

「フヒレットだよ、父さん。」
と指摘された。

「何か芸とかできるのかな」「
と言い士朗が手を差し出すとコーノは仕方なく犬みたに士朗の手
に自分の手をのせる。

「おー」

「ほんとっかしこいわねー」

と桃子と士朗は感心していた。

その後、おおわねぎで、コーノ君のややそのほかいろいろ
ざたばたしていて魔法のことなど全く聞けなかつた。

でも一応一人とも名前でよんでつけて普通に話してとこうじと
だけだつた。

第十話 決戦後高町家の家族ユーノと出会つ（後書き）

もつすぐユーノークが1000突破結構、うれしいです。

後書きの後書き

作「ねーみー、すごく眠たい」

零「寝むらずに真夜中書いてたらそうなるつて。」

作「だつて最近更新できて無かつたしそろそろしなきやと思つてたんだよ。」

なの ユーノ「健康管理は大切に」

作「なのはさん」

ウルウル

作「はじめて、制裁なしで心配してもらえた」

光をまとつたリイン？ サイズの人が近づいてくる。

? 「がんばつてよね、わたしも活躍したいんだから」

なのは ユーノ 零「それ誰？」

作「あつ、いつなかつたなレイナつて人型になれるんよ。」

なのは ユーノ 零「そつなんだ」

作「まあ、人型でいてると同時に零の魔力が比例して減つていいくけどね」

零「どうりでさつきから体が重いと思ったら。」

なのは「まあ、かわいいから、いいじゃない。」

作「そうそう、どうせ零の魔力なんだし。」

あつ あつ あつ、この小説英語で、レイジングハートとかのセリフ、打とうかなーつて思つていたんでしたが、英語マジで分かりませんので、みなさん自分の頭の中で英語変換してください。」

零「なのは ユーノ「勉強しろ、勉強」

作「うつさいわ、小学三年が」

作友「そろそろ次回予告」

作「じゃあ次回、テレビ番未放映実質2・5話ドラマCDの内容をやつていきたいと思います。」

作友以外「じゃつまたねー」

作「つぎはプールだぜ。つていうかユニークがゾロ目で増えてんだ

が。

」

番外編 悲しきお知らせ（前書き）

本当に皆様すみませんでした。

番外編 悲しいお知らせ

作「皆様、ほんとーにすみませんでした。」

零「いきなり、何あやまつてんの。」

作「えー、大学の方のオープンキャンパスが近くにあり全く更新できませんでした。」

とこう」と前話で次は水着ゲフングフン・・・ドラマシロの話にしようかと思っていたのですがーーー話遅れそうです。」

零「そーなんだ。」

作「ついでに夏だし、ホラーっぽい話も新しく執筆してこりうと思います。」

二・三日でアップしますのでそちらもよろしくお願ひします。」

零「戦闘シーンでも思つたんだけど、ホラーなんて書けんの?」

作「なせばなる、人生はギャンブルだ。」

圭介「がんばってくれよ、作者さん。」

月絵「うまくいけば、赤橋君と・・・」
キュー、バタ。

零「誰だー」

作「ああ、新しい作品のキャラクターだよ。」

他にもいるけど他のみんな用事で来れないんだ。」

零「そ、うなんだ……一人顔、真赤にして倒れたけど。」

圭介「大丈夫?、鈴木さん」

作「たぶん、大丈夫だよ。
ラブ要素はかなり少なめにするから。
てかつむしろ書けねえー。」

圭介「はじめまして、零さん。

俺は作者さんのもう一つの小説に出ることになった主人公の赤橋圭
介です。

今度は後書きに登場するかも知れませんのでまたよろしくお願ひし
ます。」

零「じつちこそ、よろしくお願いします。
二人は握手を交わす……。

作「なんかこのコーン&金——少年の事件簿のこみみたいな絵だ
な。
二人の身長的に。」

零「じゃあ、あっちの小説でもがんばってください。」

圭介「零さんも頑張ってください。」

作 零 圭介 月絵「じゃあまた、後日」

圭介 月絵「まだアップされてないけどGu-Lもよろしく。」

番外編 悲しいお知らせ（後書き）

みなさんGU-Lの方もがんばりますので期待しておいてください。

第十一話 仮修行（前書き）

皆様遅くなりました。
一応、零の修業です。

第十一話 仮修行

朝、四時三十分

「「やつ、はつ」」

道場内で美由希と零は竹刀を振っていた。

「残り、十回」

と恭也は腕組をしながら真剣な顔で言つ。

「「はいっ」」

10・9・8・7・6・5・4・3・2・1・0

二人は竹刀を振り終わると一息つき息をととのえている。

「ふー、意外とつかれるな。」

零は置いていたタオルを手に取り汗を拭いていた。

「零、どうだ？、続けていけそうか？」

「うーん、結構、疲れるけれどいい運動になりそうですし続けてい

こうかな」

一人の息が整ってきたので恭也は言う。

「零、体が温まっているうちに模擬戦やってみるか？」

「えつ、模擬戦ですか。

いいんですけど、誰が相手ですか？」

「俺だ。」

「恭也さんですか、僕初心者だけど勝てるかなあ」

「模擬戦はあくまで修行の一環、勝ち負けを気にしてるとそこから強くなれないぞ。」

じゃあ、美由希、審判頼めるか？」

「いいよ、じゃあ三回勝負で先に一本とった方の勝利でいいね、二人とも位置について。」

一人は防具をつけ、竹刀をかまえて向かい合つ。

「では、はじめ！！」

恭也と零の模擬戦が始まった。

「やつ

零はすり足で恭也に近づき上段から竹刀を振りおろす。

「甘い」

恭也は最小限の動きでかわし、ガラ空きの脇腹に竹刀をふるひ。

「ぐつ」

零は直撃し脇腹をおさえる。

「一本つ」

と美由希は言い恭也の方に手をあげる

「なかなか、いい動きだけど攻撃が丸見えだな。」

「絶対に一本、取つてみせますよ」

一人は位置に着くと零はさつきとは違つ抜刀の構えをとる。

「ふつ、おもしろい」

と恭也のバトルマニアの血が騒ぎ始めた。

「じゃあ、一本目、はじめ！」

零はすり足で接近する。

「これで、終わりだ。」

恭也は竹刀を横に振る。

零は空間予想を使いとつさに後ろに下がり、恭也の竹刀は当たらなかつた。

「なつ。」

零は一気に加速をつけ恭也の横に回り込む、恭也は防御するよひに竹刀を構える。

そろそろ零は横に短く飛び、恭也の背後をとると竹刀で一閃する。
恭也はきつぎり防ぐが竹刀が飛ばされ零は一本取つた。

「ふつ、なかなかやるね。」

「じゃあ、ラスト、はじめ！」

零はさつきと同じ抜刀の構え、恭也は居合の構えで全く動かない。

零は空間移動を使い一気に近づく。

ヒコン

零は一瞬何が起つたかわからなかつた。

零は床に倒れ首筋に恭也の木刀があてられた。

「一本、恭ちゃんの勝ち。」

二人はもとの位置に立ち。

「「ありがとうございました」」

と礼し零はその場に座り込む。

「ふー、やつぱり駄目だったか、でも最後の一閃全く見えなかつた。」

「ああ、最後のあれは居合と言つて、一定範囲に入つたら瞬時に斬り裂くといった、零の抜刀術の動かない対攻撃用の技なんだ。」

「なるほど、つまり僕が近づいた瞬間、範囲に入つて一瞬できられたってわけか」

零は美由紀から水を受け取り飲みながら言つ。

「でも、零君もす」いよ恭ちゃんから一本取るんだもん。」

「たしかに、あの動きは驚いたな。」

恭也はタオルで汗を拭きながら答える。

『あつ、あれとっさにスキル使つたなんて言えない。』

『うーん、一応、カンで一閃したんだけど・・・』

「えつ、カンで恭ちゃんから一本取つたの!..」

二人は啞然としていた。

午前七時

修業を終え、汗をシャワーで流し、道場に戻り、学校の用意をし制

服に着替え終えると、丁度ユーノを肩に乗せたなのはが呼びに来た。

「おはよう零君、朝」はんだよ。」

「おはよう、なのは、ユーノ」

「おはよう、零」

一通りあこがれを済ますと零となのははリビングに向かった。

午前七時三十分

なのははユーノを自分の部屋の段ボールに入れレイジングハートを首にかけ念話を楽しんでた。

『なのは、おいてくよ。』

ユーノと話してる中に突然介入してきて驚いた。

なのははカバンを持つて

『じゃあユーノ君行つてきます。』

『行つてらつしゃい』

零は玄関でなのはと会流すると

『じゃあ行こうかなのは』

『行つてしまーす』

と一人同時に言い、出発した。

歩きながらなのはは零に聞いてきた。

『さつき、ユーノ君と念話を話してた時、零君も話に入ってきたけど零君、念話の仕方知つてたの?』

「うーん、昨日の夜、とつさにしたからわからなかつたけど、昨日、寝る前レイナにやり方を聞いてたんだ」

「そゆこと、はじめましてのはぢやん」

小さこ手のひらサイズの女の子がなのはの前に現れた。

「えつ、誰なの？」

「ああ、僕のデバイスのレイナだよ。

僕の魔力を使う代わり、人型になつた方が話しやすいから人型になつてもらつたんだよ。」

「そうなんだ、はじめましてレイナちゃん、そういえば昨日、いつ念話したの？」

「えーと、なのはが砲撃魔法、一発外れてから僕が敵に接近するときかな」

「へー、そうなんだ、それはそつと学校でレイナちゃんの」と、ビ
ー音の言ふの

「学校ではまたキー ホルダーに戻つてもいいことになつたよ。」

「ねーねー、マイマスター、なのはちゃん乗るバスつてあれじやないの。」

レイナの指さす方向を見るとバスがすでに来ていた

「やばつ、走るぞなのは。」

「うふ。」

・・・
ふしゅー

「「はあ・・・はあ、間に合つたー」」

なのはは一息つくとすずかとアリサを見つけて一番後ろの席へ、零
はあいてる席の窓側に座り、空を見ていた。

第十一話 仮修行（後書き）

圭「じやあどりや」

作「今回の感想は一応なしだす」

零「なの「かなり更新遅くなつたのに」

作「大学生はマジでいそがしいの新しく作品も書いてるし。」

圭「おーい、零一、作者、友達連れてきたぞー」

なの「だれなの？」

零「ああ、あの黒髪の方は赤橋圭介、青髪の方は知らないな。」

作「あの人たちは、もうひとつの作品G.U.-Lのキャラたちだよ。」

零「久しづびり圭介」

圭「ひさしづびりだな、零」

なの「はじめまして、赤橋君、わたしは高町なのはって言ます。」

圭「はじめまして、なのはさん、俺のことば圭介でいいよ。」

？「圭介、そろそろ俺、自己紹介したいんだが。」

隆也「GU-Lの方で圭介の親友の七瀬隆也だ」

零「はじめまして、隆也さん。

そう言えば前、どうしてきて無かつたんですか

隆也「ああ、圭介が鈴木さんから預かつてたペンドント直してたんだ。」

圭介、完璧に直つたぜ。」

圭「ありがとう、隆也」

隆也「いって、たまにはお前もいいとこ見せろよな。」

圭「ははは、ウルせえよ。」

なの「本当に一人つて仲がいいんですね」

隆也「まあ、中学からの付き合いだしな」

作「そろそろ、俺が空気になるから切り上げるか。」

なの 零「じゃあまた次回」

圭 隆也「GU-Lもよろしくな」

作「次回は、話を飛ばし待ちに待つた水ぬけフンゲフン・・・ドラマCDの内容をしたいと思います。更新遅くなると思いますがお楽しみにおいてください。」

第十一話 夏だ！プールだ！水着だ！ 前編（前書き）

更新遅くなりました。

今回から念話は『』になります。

前回の話の流れからかなり飛びますが前々から予告してた水着会だ

|

第十一話 夏だ！プールだ！水着だ！ 前編

前回、その日の放課後、生物を取り込んだジュエルシードを封印した
・・・一カ月後・・・

ジュエルシードの反応もなく、初めの戦闘の3つとユーノが封印した1つ・前回の1つで合計5個のジュエルシードが集まっていた。

結果としては上々なのだが、やはり一人とも魔法に関しては初心者なのでなのはは、ほぼ毎日、零は剣道の練習のない日、とある公園でユーノが結界を張りその中で魔法の練習をしていた。

そして今日はなのはとユーノと零が練習していた。

「そう、集中して心の中のイメージを描いて」

「うーん」

「そのイメージをなのははレイジングハート、零は剣に渡して」

「うん・・・レイジングハートお願ひ」

「スタンバイレディ」

「いくぞ、レイナ」

「イメージと魔力を込めて、呪文とともに一気に発動」

「瞬け、明星の光、喰らいやがれ、天翔紅翼剣」

魔力は集まるが不発に終わつた。

「イメージを魔力に・・・リリカルマジカル、えーと、捕獲魔法発動」

バキバキバキ

「やつた！！成功？」

「いや、しない」

何本もの木を薙ぎ倒し、なのはの魔法は制御を失いこちらに向かってくる。

「え？ ふえええ」

「あぶね、守護結界」

とつぞに防御魔法を張り無事だった。

「なのは？ 零、大丈夫？」

「ああ、なんとか」

「私も零君が守ってくれたから」

「ふー、でもなかなかうまくいかないな」

「そうだね」

「いやそうでもないよ一力用でここまでできるようになつてるんだから」

「うーん・・・そつなのかな」

「俺の封印魔法、紅月狼影陣も練習だと失敗しやすいし」

「それは、マスターが実戦派という証拠だよ」

人型に戻ったレイナに指摘される。

なのはと零のケータイ（ケータイがないと不便なので少し前士朗に買つてもらつた）が鳴る。

「あ！ もう朝、ほんの時間だ」

武装を解いた零も

「そうですね、そろそろ戻りましょうか」

「じゃあ今朝はここまで」

「うん、ありがとうレイジングハートまたあとでね」

「グッバイ」

レイジングハートは待機状態の赤い宝石に戻る。

「はあ、攻撃とか防御とかの魔法は何とかコツがわかつてきたんだけどなあ。」

「僕も下級の技なら完璧に使えるんだけどね。」

「私のマイマスターは剣技で一応補つてるとこだね。」

「なのははエネルギー放出系が得意みたいだからね・・・元の魔力が大きい分、収束や圧縮とか微妙なコントロールが苦手なんだよ。」

「その・・・それは私が力任せで大雑把な性格ということでは、肩を落としながらのはは言つ。」

「え! いやそうじゃないよ」

「えつ、いつも力任せに砲撃撃つてると思つてましたよ」

「でも、とりあえずは大丈夫、なのはもだんだん魔力の扱いに慣れてきたみたいだし、完全になるまでは僕がサポートできるはずだから」

「そうなの?」

「うん、少し魔力も戻ってきたしもともと結界や捕縛・封印などの魔法は得意なんだ」

「たしかに動きを止めてくれたら僕の剣技もなのはの砲撃も当てや

すぐなりますね

「でも、ジューエルシードの封印するには僕の魔力では
なのははユーノを持ち上げ

「大丈夫、それは私と零君でばっちりやるから。

大きな魔力で遠距離魔法が得意な私と接近戦が得意な零君が封印。
補助魔法が得意なユーノ君は魔法の先生で封印のサポート、相性ば
つちりのチームだよ。

だから大丈夫、私達三人ならきっとね。」

「そうだね」

「なのは、零」

「さあ、帰ろう、今日も元気に朝」はんだ

「うん」

・・・・・

ガラララ

「あつ、なのは零君、おはよつ」

「おかえり」

「あ、お兄ちゃん、お姉ちゃん、おはよつ、ただいま」

「おはようございます。恭也さん、美由希さん」

「なのはは今朝もユーノのお散歩で零君は自主トレ?」

「うん」

零も首を縦に振る。

「しかし、ユーノも本当に変わったフェレットだねー、お散歩が好
きなんて」

「キュ」

「よしよし」

ユーノは美由希に頭をなでられていた。

「「まつ、なのはに早起きの習慣がついたのはいいことだな（です
ね）」」

みごとに零と恭也がハモる。

「あつ、そうだ二人とも今日の準備ちゃんとしてある？」

「今日？」

「なにがありましたつけ？」

「キユ？」

三人は思い出せない。

「ほらバス通りの向こいにうにできた新しいプールに放課後みんな
ででかけるつて」

「あーーうん、大丈夫」

「そういえば言つてましたね」

『ん？』

『ユーノ君が家に来る前にした約束なんだ、新しくできた温水プー
ルにみんなで行こうつて』

『プール？』

『せつかくだからユーノ君も一緒に行こうね』

『えーー！』

『ペット、大丈夫だからですね』

『うん』

念話でほぼ強制的にユーノは連れて行かれることになった。

「お兄ちゃんもいつしょだよね？」

「俺は現場の手伝いだけどな、監視員だ」

『えつ、僕も一緒つて・・・えつ、あの』

「なのはも行くの初めてだよね。』

遊べる施設もいっぱいあつて樂しいらし』よ』

『えつ、なのは。』

ねえ、なのはちよつと』

「アリサちゃん達と一緒に樂しみにしてたんだ』

『つて、聞いてないね。』

『大丈夫ですよ、僕は聞いていましたから、まあ、ドンマイ』

・・・

キーン』ローンカーン』ローン

「さて、授業終わり』

「準備 K』

「僕も大丈夫ですよ。』

「それじゃあ待ち合わせの場所に』

「「「「しつぱーつ」」」」

息もぴつたりに四人は教室を出る。

第十一話 夏だ！プールだ！水着だ！ 前編（後書き）

もつひょっと待ってください。
すこく長くなりそうです。

後書きの後書き

作「ふふふはーはは、やつたついにきたぞ夏休みが
零「やつと勉強漬けの毎日から解放されたらしく、テンションだけ
一な」

なの「この人が作者だと少し泣きたいです」

作「本当に長かった、オープンキャンパスの手伝いをして、徹夜で
テスト勉強して・・・そしてついに私は帰ってきた、さあ祭りの日
は一つ大きな花火を打ち上げようじやないか。」

零・圭「ちょっと、黙れー」

ドロップキック炸裂

ズザザザ

零・圭「よし！」

作「よくねーよ」

なの「はやつ」

零・圭「ちつ」

作「いつたい何、いきなりドロップキックって」

圭「まあ、それはノリなんだけど俺たちの話いつ更新なのかなーっ
て思つて」

作「・・・」

圭「あれ？」

返事がないただの屍のようだ・・・

圭「逃がすか」

作「すいませんでしたこっち考えるのに必死でそっちまで手が回ら
なかつたんですよ。」

圭「まあ、いいや今度連日投稿しろよな、しなかつたらなのはさん

よろしく
「へ

なの「ぱつこぱつこ元してやるの」

作「サーイエッサー」

ビシッ

零・ゴーノ「さて次回は中編だ、なのは達が水着になるナビエロ要
素は全くないからながつかりしろ」

全員「じゃあーまた」

第十三話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 1（前書き）

前回の続きです。

第十二話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 1

授業も終わり教室を出た四人は廊下で雑談をしながら下校しようと/or>していった。

「午前中、授業つて楽でいいわねー放課後、いっぱい遊べるしさ。」

「うん、そうだね。今日のプール、楽しみ楽しみ。」

「ちゃんと水着持つてきた？」

「うん、もちろん」

「泳ぐの好き好き。」

「そういうえば、僕つて記憶ないからよくわからないんだけど泳げるのかな？」

「泳げなかつたら、私と一緒に美由希さんかノエルさんに泳ぎ教わろうよ」

「そうですね。」

「つきわ使つてもいいみたいだから、ファリンに持つてきてもらつてるよ。」

「それもいいけど、やつぱり一緒に教えてもらう人がいれば頑張つてみよーかなー」

「一人ともがんばれー。」

「あの、なんで僕、試してもないのに泳げないことになつてゐるの。天気もいいし、つきわで普カ普カもいいなー」

そういう会話をしながら、零達が学校を出ると、一台の車が近づいてきた。

「すずかちゃん」

「ファリン」

「アリサお嬢様、なのはお嬢様お迎えにあがりましたよ?」

「「ノエルさん、ありがとうございます。」

「どうして、疑問形?」

「えつと、あなたは?」

「えつ、すずかさんから聞いていませんか?」

「ああ、あなたが零君ですか、はじめまして月村家でメイドをしているノエルといいます。」

「はじめまして」

「じゃあ行きましょうか。」

・

全員車に乗り込むとなぜかノエルさんとファリンさんが笑顔でいて、すずかが顔を赤くしていた。

「大丈夫ですか?」

それに気づいた零はすずかに聞く。

「大丈夫・・・です。」

すずかはさらに顔を赤くして答える。

「それはそうと、美由希さんは現地集合ですか?」

「うん、ユーノ君も一緒に」

「ふふふ、なのは、もうユーノとすっかり仲良しね」

「にやははは」

「ユーノ君かっこいい子でいいよね」

「うん」

零は会話に参加せず空を見ていた。

第十二話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 1（後書き）

皆様すみません。

今回、急用が入ったのでここで次回へ

今回の後書きの後書きはお休みさせていただきます。

本当にすみません。

第十四話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 2（前書き）

長らくお待たせしました。
前回と前々回の続きです。

第十四話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 2

零は空を眺めながら言った。

「そういえば、僕、泳ぐのってはじめてだなあ・・・まあ記憶がないからわからないけど、泳げなかつたら僕も泳ぎ方を教えてもらおう。」

・・・同時刻 高町家・・・

「先日、海鳴市みさか町で発生した市街地の壁が突然壊れた事件ですが・・・」

ユーノはフレットの姿でリビングのテレビで先日の戦いの被害が報道されていたニュースを見てた。

「次のジュエルシードはまだ見つからない・・・あまりなのはと零にたよつてもいけない、僕がもつと頑張らなきや。」

玄関の門が開く、音が聞こえユーノはすぐにテレビの電源を切る。
「ただいまー、って誰もいないか

美由希が家に帰ってきてリビングにいるユーノにさわぐ。

「あ、ユーノただいま」

「キュー」

「またカゴから出でやたの、もつすつかりはなし飼いだね。」

「キュウ」

「まあ、こいつがユーノは良い子だもんね

「キュー」

「よしよし、さあ今日はみんなでプールだよ私は着替えてくるからユーノはここで待ってるんだよ。」

「キュー

・・・数十分後 プール・・・

ピッパー

「プールサイドは走らないでください、危ないですよ」

「『みんなさーい』

恭也がプールの監視員姿をしていた。

「あつ、恭也さんだー」

声が聞こえた方に恭也が振り返る。

「アリサ、早いな一番のりか?」

「零は向ひつで準備体操してゐし、なのはとすずかたひは、着替え
ています」

アリサは赤色のビキニを着て答える。

「そうか」

「恭也さん、なんか監視員姿似合いますね」

「そうか?」

「あつアリサちゃん、お兄ちゃん」

なのはが薄ピンク色のスクール水着タイプの水着姿でなのはより少し遅

「恭也さん」

すずかは白紫色のスクール水着タイプの水着姿でなのはより少し遅
れて歩いてくる。

「こんにちはー」

ファリンも紫色のスクール水着タイプの水着姿でノエルは白のビキ

「姿ですすかと一緒に歩いてきた。

「ここにいるは、恭也様」

「ああ、やつじば美由希は？」

「えーと、お姉ちゃんとコーコ君はまつすぐ

美由希が黒いビキニ姿で少し小走りで来た。

「おまたせー、おお恭ちゃん監視員姿似合ひ

「似合ひ？」

「あつ、いたいた、おーいみんなー」

零も体操が終つたので小走りで合流した。

「恭也さん、すくべ監視員姿似合ひますね。」

「似合ひ？」

「うん、似合ひ似合ひ」

「キヨ」

「で、こつちはどう今年のみんなの水着姿は？」

「ビビット決めてみました」

「えつと、その、零は？」

零は田のやつ場に困つてこるみたいでつづらつていていた。

「セクシー？」

恭也はかんねんしたみたいで

「うん」

と短く答えた。

第十四話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 2（後書き）

もつねるねるネタが

後書きの後書き

作「いやー結構期間があいちやたねー。」

零「そうですよ、この前の急用何だつたの？」

作「旅行行くことになつちやてさ一泊三日のとすがにずっとパソコンつけとくのもやばいかなーて思い前回みじかかつたんだよ」

なの「じゃあ残りの期間は？」

作「やる気が出なかつたのと、弟に途中まで書いていたのを消されたのと、ネタが思いつかなかつたの三つですね。」

零・なの「ダメ作者め」

作「あつ、そろそく、はいお土産、零とレイナさんにはゆずアイス、なのはさんにはゆずケーキです」

零・なの「あつありがとう」

零となのはが受け取ると突然作者が吹っ飛ぶ

零・なの「？？？」

圭「まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ、即効魔法発動バーサーカーソウル、このカードはイライラをMAXにして発動、作者にのみ追加攻撃できるので、まあいくぜまず一回田」

作「ぐほつ

圭「一回田」

作「がはつ

・・・その後、三十回は続いた。

零「意外とさつぱりしてておいしかつたな。

そろそろ」「P.Oなんじゃね

なの「こつひも適度の酸味がおいかつたよ。

いつたいなにがあつたの」

「まだ俺らの話アップしてねーんだよ」

零・なの「えつ」

作「俺の引いたカードは死者蘇生、さあ俺よ死より蘇生し天を舞え炎を走らせる」創始者と云つて――

三一書院

作「ぐふつ・・・すいませんでしたー。

マジでネタが思いつかないのホント勘弁してください」と
なの「悪魔らしさ」やり方でやつてあるから

ガシツ

作者を止める音

の「全力金農・ヌタ」

? ? ? 1 「響け終焉の笛・ラグナロク」

? ? ? 2 「雷光一閃・プラズマザンバー」

作 や サ め そ ん な こ と し せ ゃ い け な い

作「トラップ発動ディバインウインド」

無意味だつた。

「うつーーひどい

作「中編いつまで続く

なの・零「えつまだ続くの」

第十五話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 3（前書き）

遅くなりすみません
少し凹んでいました

第十五話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 3

恭也達が話している間のはは、コーカと念話で話していた。

『コーコー君』めんねなんか強引に誘つちゃたみたいで、でも夕方からまたジュエルシード探しするから。』

『うん、でも今からは気にしないでみんなとのしく遊んでよ。』

『うん、ありがとうコーコー君』

なのははコーコーとの念話を終わらすと美由希があたりを見回しながら言つ。

「でも『』いね飛び込みプールあるし、流れるプールあるし」

ファリンは事前に調べていたみたいで

「あっちにはお風呂がありますよ」

「それは素晴らしい」

「ノエルお風呂好きだもんね」

すずかが呆れたように答えていた。

その呆れ用からどんだけ好きなのだろうと疑問に思った少年が一人いた。

コーコーは真剣な表情であたりを見回していた。

『ん？ コーコーどうかしたか？』

『どうやら、なのははきずいてないみたいだけど、かすかに魔力の気配がする、だれかの強い願いにジュエルシードがそれに反応しうとしているみたいだ。』

『とりあえず、僕は警戒しておくよ。』

零はすぐにジユノルシードが発動・暴走し戦闘開始である。レーベンもついでにアリサが

イナを行こうとする。

「い、めん、みんなちょっと忘れ物したからロッカーに取りに行つてくわよ。」

一応、言つてロッカーに向かつ。

「あれ？ 零君は？」

「どこに行つたんだろ？」

なのは達があたりを見回す。

「ああ、せつしき忘れ物したから取りに行くつて言つてたぞ」
恭也が答える。

「まあ、いいわ、それより恭也さんあれ何ですか。あのお立ち台みたいなの」

「ああ、そのまんまだよ、希望者が歌つて踊れるステージなんだ」

「…………えー…………」

「こんな場所で歌ですか」

「いや、これが結構人気あるんだよ、つこせつしきも女の子たちが歌つてたし」

アリサが提案する

「えへへ、だれかうたう？」

「私は、いいよ」
すずかは横に首を振る。

「私も」「えんりょ」

なのはも手を振り拒否する。

「美由希さん？ファリンさん？」

「ダメダメ、私歌下手」

「私なんかもつとです」

全員拒否しているとノエルから助け船が出される。

「やはりここには言いたいだした方が先陣をきるべきでは、ねつアリサお嬢様」

美由希がわるのりする

「アリサの歌を聞いてみたい人」

「――――は――い」――――

全員が答える。

「えー、やぶへびだわ、これは何かの罠？」

恭也は案内する

「ほり、受け付けはあっちだよ、アリサ」

「がんばってアリサちゃん」

「ファイト」

なのはとすずかから声援が送られる。

「いいわー泳ぎ前の景気づけ、気合い一発歌つて見せようじやないの」

「――――えー」――――

「うー」

アリサはうなりながらも受け付けに向かつ。

タツタツタツ

「はあ・・・はあ・・ふー、ただいま

零がみんなと合流する。

「あつ、お帰り零君」

「あれ、アリサは？」

聞いた瞬間、いきなり会場で歓声が上がる。

「では、次の参加者、アリサさんビーナー」

舞台の上にアリサが現れる。

「では、歌つてもらいましょー、曲はFIRST CONTACT

よろしくおねがーいしまーす」

・・・・・

パチパチパチ

歌い終わると会場から大拍手

そしてアリサは退場していく

「アリサさん、ありがとー、じゃこましたー」

・・・

第十五話 夏だ！プールだ！水着だ！ 中編 3（後書き）

FIRST CONTACTは緋弾のアリアのアリアのキャラソンです。

完全声優ネタです。

後書きの後書き

作「夏休みが終わっちゃったー」

零「今回はなんでこんなに遅れたの？」

作「ちょっと、やる気が出なかつたのと夏バテと困んでたり、ネタが思いつかなかつたのさつだね」

零「まあ前回の後書きであんなことされたらそりゃむかづかやる気は自分で出すもんだろ？」

作「だつてそー単位があまりとれなかつたし、前あんな攻撃されちゃたらね」

零「まあ、がんばれ

作「あつそつわい、最近、携帯がぶつ壊れてさ困んだんだよ」

零「なんか大事なデータでもあつたの？」

作「うん」

零「まあドンマイ

作「そういえば、あるワジオでー俺の出したメール読まれてちよ
つとわしがった」

零「へー

作「じゃあネタもねえしそうなん」

零・作「じゃあまた次回」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2837t/>

魔法戦士リリカルなのは 1st memory

2011年10月15日04時12分発行